

2020年4月27日

## 変貌する岡山・倉敷市の青果市場

[いいね!](#) [シェア](#) [Tweet](#)

岡山県で第2位（中国地方では第3位）の人口規模を持つ倉敷市。県都・岡山市をはじめ、山陽、山陰、四国の各方面へ交通至便な地にある同市の青果市場は民設民営ながら、大卸3社が同じ場所で営業してきた。が、いまや全国的にも珍しくなったその体制もまもなく終わりを告げようとしている。既報 [2020年4月24日付](#) のとおり、大卸の一角である、大印(株)倉敷大果（倉敷市、花田紘司社長、年商10億円）が今月末をもって営業を終了するためだ。

今後、大卸2社体制となる同市場だが、最大勢力の倉敷青果荷受組合（同市、冨本尚作理事長、年商125億円）、2番手の丸倉青果物協同荷受組合（同市、宮原進理事長、年商15億円）の現況はどうか。最新の動きをチェックしてみたい。

### ■丸倉青果でも組織の役割を見直し

丸倉青果協同荷受組合（以下＝組合）でも直近、組織再編を実行した。組合ではこれまで市場開設者と大卸とを兼務してきたが、今月17日、それらを100%子会社の丸倉青果(株)（小河原金平社長＝組合専務理事）へ移管した。「改正市場法施行を前に、県から『任意組合では卸売市場の開設者として認定できない』との説明を受けたための措置だ」（関係者）。子会社はしょうが茶、椎茸スライスなど農産加工品の製造を担ってきたほか、大卸部門などグループの全従業員も、以前から同社の所属となっていた。

かつては倉敷市場の3陣営とも、自らが開設者と卸売業者を兼ねる民設民営市場ならではのスタイルだったが、のちに倉敷青果と倉敷大果は共同出資の(株)倉敷地方卸売市場という名目上の開設者を置いた。「野菜安定供給基金の関係で設置したが、このとき、丸倉青果は入らなかった」（関係者）。ちなみに、倉敷より西へ40数キロの広島・福山市にも、倉敷と同じく民設民営で青果大卸3社が併存する『福山地方卸売市場』があるが、こちらは青果大卸3社と水産大卸が共同出資する(株)福山地方卸売市場を開設者としている。

丸倉青果の敷地は組合名義の私有地だが、組織変更するにあたり、土地まで子会社へ譲渡すると高額な贈与税が発生することが判明。「行政から補助は出ない。自社の都合でないにもかかわらず多額の出費が伴うのは出資者の理解が得られない」として方針を転換。子会社が開設者兼大卸となり、組合は土地を所有したまま小売・量販向けの販売を担う「仲卸」的な役割を持つようにするという。「子会社＝大卸が組合＝仲卸へ販売することで、組合から子会社に手数料が落ちる仕組みとした。仕入れと販売で担当を分け、コストに対する意識を高めたい」（小河原専務理事）。

### ■赤字対策の意味合いも

法改正を契機とした組織再編だが、近年、続いている赤字への対策という意味合いも込めてい

る。丸倉青果はもともと地元農協の「支所」として生産者が持ち寄り販売する場だった。そうした経緯もあり、組合には地元の生産者らが出資している。かつて「無借金経営」といわれた丸倉青果は、いまでも「銀行借入れは、短期決済のためなどごくわずか」（関係者）という。「出資者の手前、借入れしてまで経営は行わないという堅実な気風がある。が、近年は直荷が減少。近隣の農家は高齢化で生産量が少なくなり、道の駅などへ販売するようになった。量販店対応としては量がまとまらないことも多い」（市場筋）。

2010年12月期まで20億～21億円を上げていた年商も、ここ数期では16年17億5000万円⇒19年15億円まで縮小。利益面もここ4期連続で欠損に。本業の儲けを示す営業ベースでも赤字となっている。

そうした業況もあり、「一部の出資者から組合の解散と出資金の返還を求める声が上がっている」（市場筋）という。出資者も代替わりしており、多くが農業とは別の仕事に従事。組合の執行部にも農業にゆかりのない理事がいる。「寄り合い所帯のため、業況がよい時はいいが、悪くなると『取り分が少なくなるから閉めてほしい』となる」（同筋）。

これに対し、小河原専務は「そうした声があるのは承知しているが、数十名のスタッフとその家族の生活を守ることが大事。一部の出資者のために不動産の切り売りすることは不可能だ」と主張する。専務は業容再拡大に向け次なる一手を思案中の様子。今回の組織再編が「粗利が取れる仕組み」への第一歩となり業績改善が果たせるのか、注目したい。

## ■岡山丸果と倉敷青果で「逆転劇」

一方、倉敷市場最大勢力の倉敷青果荷受組合。同組合は12月決算だが、2019年度（19年4月～20年3月）でみた売上高は125億9000万円（前年同期比103%）。対して、『岡山市中央卸売市場』の青果部をリードする(株)岡山丸果（岡山市、花房昌男社長）は124億1000万円（同94%）だ。両社の差は17年度「24億円」⇒18年度「9億円」と徐々に縮まっていたが、「岡山丸果に照準を定めている」と目されていた倉敷青果がついに1億8000万円の差をつけて逆転。相場の低迷が続くなかで昨対をクリアした倉敷青果と大きく割り込んだ岡山丸果で明暗を分けた形だ。

倉敷青果ではカット野菜など関連企業を含めた「クラカグループ」全体の連結年商でも昨対をクリア（101.8%）し177億9000万円となった。躍進を続ける同グループからも目が離せない。

〔担当記者直通電話092-781-9573〕

いいね! シェア Tweet

この記事に関する情報をお寄せください

2020年4月27日  
＜新型コロナの影響を追う＞  
「楽観ムード」...



2020年4月27日  
豆腐類製造・販売のグローリー  
フーズ(大阪)が決断か